

創造の原点と輝き — 10

バウハウスからウルム造形大学へ



浅野忠利

●ウルム造形大学の誕生

1945年、第二次世界大戦での敗戦と共に、ドイツ・プロテスタントのキリスト者が素早く動いた。ヒットラーを許した罪の懺悔を全世界に明らかにし、二度と繰り返さないことを誓ったのである。シュトゥットガルト罪責宣言である。こうした背景の中、ナチスへの抵抗運動体『白バラ』の構成員であった弟妹を大逆罪による絞首刑で失った姉インゲ・ショルは、平和への祈りを込めて、1946年にはウルム市民大学を開校した。続いて1950年には、バウハウスの再興を願って、造形教育の為の大学の設立を目的に、ショル財団を設立した。1952年、ショル財団によって『ウルム造形大学』が創立されると同時に、アメリカ合衆国より100万マルクが提供された。その他、資材援助などもあって、1953年9月ウルム・クーベルグの丘で念願の校舎着工の運びとなった。この時、大聖堂の前の広場や水車小屋では授業が開始された。時に学生19名であった。1955年10月新校舎の竣工に併せ、ウルム造形大学の公式開校となった。初代学長マックス・ビル（デッサウ・バウハウスで学んだ）の主導により、バウハウスを継承し、バウハウスを超える前進を目指しての出発であった。より一層、日常環境の質の向上に注力し、『スプーンから都市計画』の幅広い分野への挑戦を標榜したのである。1968年までの13年間という短い命の出発であった。

●ウルム造形大学の概要

インダストリアルデザイン、建築、視覚芸術、報道の4学科、4学年の構成であった。生徒は約150名、このうちドイツ人学生は40%~50%で、ヨーロッパ諸国をはじめ、南北アメリカ、アジア、アフリカと世界の各国から集った。教授陣は学長、副学長の下、10名前後の教授、6名の工房の技術指導者、50名前後の客員教授、加えて10名を超える助手（助教授を含む）総計約80名で、世界各国から、馳せ参じ、新しい造形教育に、戦後の夢を託したのである。カリキュラムは造形の基礎を身につけられるように、一つの課題に対して理論の週と実践の週が一对で用意されていた。理論の為には、豊富で充実した陣容が編成された。課題に応じて、最適の客員教授が、世界中から参集した。実践の為には木・印刷・石膏・金属・写真・樹脂の六つの工房が用意され、マイスターと呼ばれる技術指導者が配され、学生はマイスターの助言のもとに自らのデザインを自らの技術で創ることが出来た。こうした、この恵まれた造形教育環境を維持する為に、ウルム造形大学の財政は火の車であった、常に公的機関の支援を必要とした。創立間もない1957年64.2万マルク、終焉真近の1966年

195万マルクの財政規模に対して、バーデンビュルテンブルグ州の文化省と財務省は合わせて、大学財政の約三分の一から半分を賄った。国と市はそれぞれ約1割を負担し、公的資金の割合は当初の4割から、終焉間近の1966年には7割を越すに至っていた。

●起訴課程と専門課程

1年間の基礎課程と3年間の専門課程の編成となっていた。基礎課程：当初各専門課程から独立し、各学科共通に位置づけられていたが、1961年からそれぞれの専門課程に組み込まれ、4年間の専門別の教育が行われるようになった。理論（教授陣による多彩な講義）と実践（主に工房における制作）の繰り返しの中で、色彩、形態、光などに関する造形の習得や造形理論の深耕が図られた。課題設定には、バウハウスの流れを汲む、特色ある展開が見られた。

専門課程：4学科の概要は以下の通りである。

- **プロダクトデザイン：**教育目的は日常生活や生産活動など社会の広い分野で使用されるものの造形を通して、環境改善に資することである。ブラウン社の電気製品、ローゼンタール社の食器、ハンブルグの地下鉄など実用化された製品の数々はドイツ工業デザインの中核を形成した。
- **視覚芸術：**この学科は印刷部門と映像部門により構成されていた。印刷部門はグラフィックデザインを中心に写真、展示、パッケージなどを対象にした。後に技術情報を取り扱う部門が加えられ、サインや科学データ表示も対象とした。航空会社ルフトハンザのコーポレート・アイデンティティ、各種ポスターなどの広告。ショールーム・デザインなど多岐にわたって活動した。
- **報道：**マスコミ関連の人材育成を目指した。授業はマスコミの編集部、企業の宣伝部を想定した場が設定され、実践の中で繰り広げられた。メディア言語の習得などの基本に力を入れた。
- **建築：**工業化された建築のみを対象とした。学生が建築に関する専門的素養を身につけていることを前提に、工業化に伴う諸問題を解決する能力を持つ建築家を育てることを目的とした。鉄筋コンクリートによるユニット工法の開発、PVCパイプによるドームの開発、アングルスラブによる住宅システムの開発、リングユニット工法による住宅団地計画など多くの開発を世に問うた。実物大の試作実験を重ねた信頼性の高い優れた諸提案であった。

今回は基礎課程の課題について、実例を採り上げてみたい。